KPU NEWS

No. 152
JAN. 2008

京都薬科大学
KPUNEWS 編集委員会

中期計画「躬行プラン」の推進

理事長　滝野 哲

明けましておめでとうございます。

皆様それぞれによい年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

2008年を迎えましたが、世界ではグローバル化が進み、社会の変化･進歩のスピードが益々加速する中、国内においても政治、経済、社会面において様々な問題が生じ、それぞれの分野で変革が求められております。私立学校も経営環境が一段と厳しさを増し、対応を誤ると経営破綻の虞(おそれ)もあることから、平成17年には私立学校法の改正により学校法人の経営管理制度が強化され、理事会の経営責任が重くなりました。

その様な中で、5年後の大学のあるべき姿として、「時代が要求する医療薬学を切り拓く人材を育成する大学」「小さいながらも先端的で高度な研究を行える大学」の2点を掲げました。本学校法人は学内の透明性を高め社会のニーズに合った魅力的な大学として向上して行くため、昨年6月に大学運営の改革強化を目的とする中期計画「躬行プラン」を策定しましたが、学内の一部に「教学の自治」を侵すものであるとの誤った意見がありました。

しかしながら、同計画は2006年度から薬学6年制教育がスタートし、医療薬学の高等専門教育、先進知見の研究･開発機関として社会の期待が高まる一方、厚生労働省の医療制度の改革、新設薬系大学の乱立や薬学部の新設、少子化による大学全入時代到来、年限延長に伴う志願者の減少等による経営環境の悪化に対処するには避けて通れない問題であるとの認識に基き、本学の現状を中心に学内の多くの関係者からのインタビューを参考に真剣に検討し策定されたものであります。

本学の現状と将来を見据えた視点に立って、今後も「躬行プラン」の推進にご理解とご協力を賜りますようお願いする次第です。

最後になりましたが、皆様のご活躍とご多幸をお祈りして、年始の挨拶とさせていただきます。

CONTENTS

中期計画「躬行プラン」の推進
理事長 滝野 哲……1
2008年の新年を迎えて　学長 西野 武志……2
新任のご挨拶……2～3
昇任のご挨拶……3～5
定年退職のご挨拶……5
特集 臨床薬学教育研究センター……6～7
ドイツ滞在記……8～11
秋のオープンキャンパス開催……12
受賞……13～14
International Symposium in CANADA……15～16
2008年度一般公募制推薦入学試験結果……16
Library News……17
2007京薬祭を終えて……18
2007年度後期試験日程……18
教育後援会からのお知らせ……19
クラブだより……19
お知らせ……19～20
京薬会だより……20

2008年の新年を迎えて

学長　　西野 武志

明けましておめでとうございます。「一年の計は元旦にあり」といいますが、学生の皆さんも新たな目標や計画を立てられ、希望に満ちた新年を迎えられたことと思います。

ところで、昨年は病院や薬局の実務実習に行く前に受けなければならない共用試験のCBT(computer based testing;コンピューターを用いて知識を評価する客観試験)とOSCE(objective structured clinical examination;診療技能・態度を評価する客観的臨床能力試験)のトライアルをそれぞれ200名と90名の4年次学生を対象に行いましたが、今年度は4年次生全員を対象に行いますので、ご協力をお願い致します。新しく完成する「臨床薬学教育研究センター」などでこれらの共用試験を行いますが、薬剤師が医療チームの一員として活躍するために必要な共用試験であることを認識していただきたいと思っています。

今年はネズミ（子）年ですが、十二支の中に猫が入っていない理由をご承知でしょうか？あるとき、お釈迦様が動物たちに「来年の元旦の朝に早く来た順に12の動物を選ぶ」と宣言された。ところが猫は行く日を忘れたのでネズミに聞いたところ、ネズミはいつも他の動物から馬鹿にされていたので「猫さん、それは1月2日です」と嘘を教えた。牛は歩くのが遅いので、大晦日の晩から出発し、その背中にネズミは隠れたりして、お釈迦様の前に来た時に牛の背中から飛び降りて一番の座を得た。従って1月2日にやって来た猫は十二支の中に入ることができなかった。それ以来、猫はネズミを追いかけるようになったとの事で、多くの諺「鳴く猫鼠捕らず；猫の前の鼠の昼寝；猫の留守は鼠の代；猫の居ぬ間に鼠遊ぶ；猫の額にある物を鼠が窺う；窮鼠猫を噛む」が知られている。

また、「風が吹けば桶屋が儲かる」という諺は、風が吹けば土埃が舞い上がり、その土埃が眼に入って、失明する人が増え、失明した人は三味線を習うので、三味線に使用されている猫の皮の需要が増える。その結果、猫が少なくなり、ネズミが増え、増えたネズミは桶をかじるので、桶の需要が増えるとのことです。これは皆さんが習われている多くの講義で、互いに無関係に見える科目が、実は相互に大きな影響をもたらしていることを意味しています。今、勉学されている全ての科目の中には、医療に貢献する人材として活躍していく為に必要な知識が必ず含まれていますので、日々の時間を大切に真剣に取組まれることを望んでいます。最後に京都紫野の大徳寺にある「高桐院」の書院に掲げてあった詩を紹介しておきますので、学生時代をどのように過ごすかを、時々振り返っていただくことを期待しております。

花は黙って咲き
　　黙って散ってゆく
　　そうして　再び枝に帰らない
　　けれども　その一時一處に
　　この世のすべてを託している

新任のご挨拶

生命薬科学系
微生物・感染制御学分野
准教授　奥田 潤

昨年10月1日付で微生物・感染制御学分野に着任致しました。私は本学の修士課程（旧微生物学教室）を修了後、平成8年に京都大学大学院医学研究科博士課程（竹田美文教授）を修了し、学位を取得しました。その後、京都大学の機関研究員として3年間勤務後、一度大学を離れ、第一製薬（株）・創薬第一研究所の研究員として3年間勤務しました。しかしながら、再度大学に戻る機会を得て、東京大学・医科学研究所の助手として、病原性細菌である赤痢菌がどのようにして赤痢を引き起こすのかについての基礎的な研究を3年間行いました。さらにその後、広島大学大学院・生物圏科学研究科の助教授として広島へ転任し、3年半という短い間でしたが、生物生産学部および大学院における教育・研究活動に携わることができました。そしてこの度、広島から実家のある京都へ舞い戻る機会を与えていただいた次第です。このように私は学位取得後、ほぼ3年おきに研究・教育職を転々として参りました。そのために、

じっくりと長期間にわたって腰をすえた研究・教育活動を行うことはできずに参りましたが、その反面、これまでに薬学部、医学部、大学附置研究所や製薬企業研究所での医学薬学研究・教育および生物生産学部での応用微生物学研究・教育によって、病原微生物やその病原体と宿主の生体防御との関わり、さらには病原微生物により引き起こされる感染症などについての経験を積むことができました。これらのさまざまな環境で習得した知識・技術を本学での講義や実習に生かすことによって、学生が病原微生物学や微生物感染制御学への興味をかき立てるように努力していきたいと思っています。それらの担当講義や実習を介して、将来一人でも多くの学生が、薬剤師として病院での感染制御や病原微生物学の研究領域に興味を示し、専門性を持った薬剤師や研究者としての道を目指してくれればと願っております。微力ながら、本学そして社会に少しでも貢献できるように研究・教育に邁進していく所存ですが、まだまだ経験の浅い若輩者ですので、至らぬところは皆様からのご指導、ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

医療薬科学系
薬剤学分野
准教授　坂根 稔康

10月1日より薬剤学分野に准教授として就任いたしました。私は昭和60年に京都大学薬学部を卒業し、その後、同大学大学院修士課程を修了し、博士後期課程に進学しましたが、平成元年に博士後期課程を途中退学し、助手として摂南大学に赴任しました。摂南大学に15年間勤務した後、平成16年より岡山に新設されました就実大学薬学部に助教授として異動し、3年半勤務いたしました。摂南大学は赴任当時、設置6年目、就実大学も設置2年目で、いずれも歴史の浅い大学でしたが、一転して歴史と伝統のある京都薬科大学の教員となり、身が引き締まる思いです。また、他の2大学と比較して、学生さんの質や研究活動のアクティビティなど、京都薬科大学の歴史と伝統を実感する毎日です。

近年の薬学教育を巡る環境は非常に厳しく、前職の就実大学では2年連続で入学者数が定員を下回っておりました。薬系大学の新設も減少したとはいえ、来年度も新設され、志願者の減少という状況は今後も続くものと思われます。一方で、薬学部卒業生の就職をめぐる現状は未曾有の売り手市場となっておりますが、早晩、薬剤師供給過剰の時代が到来することは間違いありません。大学の入口と出口における問題に対処するためには、社会のニーズにあう能力をもった卒業生を送り出すことが重要と感じています。薬科大学の卒業生が薬剤師の資格を持っているのは当然で、一定レベルの国家試験合格率は必要不可欠と感じています。京都薬科大学の卒業生の進路は多岐にわたっておりますが、臨床の現場に身を置く薬剤師を目指す場合は研究活動を通じて醸成される問題解決能力が、また、研究者を目指す場合は十分な薬学の素養が重要と考えており、教育を通じて、そのような能力を兼ね備えた卒業生の育成に努めたいと考えています。

まだまだ、勉強をしなければいけないことが多い若輩者ですが、皆様方からのご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

昇任のご挨拶

分析薬科学系
薬品分析学分野
教授　北出 達也

昨年10月1日付で北村桂介先生の後任として薬品分析学分野の教授に昇任させて頂きました。私は昭和58年3月に本学大学院博士課程を修了した後、同年4月から本学 薬品分析学Ⅱ教室(現 薬品分析学分野)の助手として特に機器分析学に関する教育・研究のためのメンバーに加えて頂き現在に至っています。

当初、教室主任でした穂積啓一郎教授の下では、プラズマ重合法を用いた機能性新素材の開発研究に携わっていました。この頃に先生方をはじめ多くの研究室の先輩方や後輩達に教えて頂いた知識や経験が、現在における私の研究の礎になっているような気がします。

平成2年に北村桂介教授が教室主任になられて以降は、主に、非侵襲的、非観血的な臨床分析法の開発に興味を持ち、分子インプリントポリマーを感応素子とした超微小針状人工免疫センサーの開発を行っていました。現在はこれに加えて、薬物のリポソームや脂質エマルジョンへの分配に関する研究、薬物の血清アルブミンへの結合に関する研究を推進しています。これらの研究について成果を挙げ、医療など多くの分野に貢献することはもちろんですが、その一方で、学生の皆さん方がこれらの研究を通じて知識や技術、思考力を体得し、それらを糧として多くの有為な人材が育つように教育することの重要さも痛感しています。

教育は人造りです。学生の皆さんを慈しみながら手間隙かけて育めば必ず大成してくれると信じています。そのためには常に自身を学生の中に置き、学生と共に成長するという姿勢が大切だと考えていま

す。その結果として、社会の荒波の中で生き残れる能力、人格や使命感を持った人材が育ち社会に送り出すことができれば、と望んでいます。30年余り京都薬科大学から一歩も外に出ることなく本学と共に歩んで参りました。井の中の蛙で世間知らずな部分もありますが、この経験を教育、研究、大学運営に生かして、本学の発展のために微力ながら貢献できるように努力する所存です。今後とも宜しくご指導、ご鞭撻、ご支援を賜りますようお願い致します。

分析薬科学系
代謝分析学分野
教授　安井 裕之

平成19年10月1日付で代謝分析学分野の教授を担当させていただくことになりました。私は、平成7年に京都大学大学院博士後期課程を修了後より、当時の本学薬剤学教室の助手、引き続いて代謝分析学教室の助手、助教授、准教授を勤めて参りました。これまでの在職中は、公私に亘り本当に多くの方々から大きなお力添えを賜り、大変お世話になりました。まずは書中をもって略儀ではございますが、改めて厚くお礼申し上げます。

最近、興味深い新聞記事を読みました。総務省の社会生活基本調査によると、20年前から減少傾向が続いていた大学生の勉強時間が、平成18年の調査では急増に転じたのです。研究中心だった大学が教育にも力を入れるようになったこと、学生のほうも就職難の時代が続き、しっかり勉強しなくてはという意識が浸透してきたことが影響しています。それでも、1日あたりの勉強時間に換算すると、小学生高学年の4時間半、中学生・高校生の5時間半と比べて大学生は伸びても3時間半です。これは、何を意味しているのでしょう。

小学生は素直です。保護者会で話しかけると「○○をがんばっている」と具体的な目標を言ってくれます。中学生もまだまだ素直で、広報委員として講演に行くとキラキラした目で私の拙い科学話を聴いて質問までしてくれます。高校生になると、講演中はやや醒めた反応も見られますが、目の前の勉強や学び方そのものが大学で学び、社会で働く際にどれほど役に立っているか、経験談を打ち明けると受け止めてくれるようです。年齢を重ねるうちに、彼らは努力と成長がすぐには正比例しない現実を知るのです。それは他人の話を聞くときの態度に表れています。大学生はどうでしょう。講義中に私語が増えてくると、友人、知人から教えてもらった製薬業界や薬剤師業務の現状を少しの時間だけ話題にします。すると、打って変わりすぐに静かになって真剣な目で聴いています。実社会で働くのは大変なことだから、最低限、最初のベースとなる薬学の専門性を柔らかい鎧として身につけて欲しい。だから、目の前の勉強に意欲を持って欲しい、と伝えます。大学生にも学ぶことへの動機付けは大切なのです。

「あなたは何故、薬学を学んでいるのですか？」と聞かれたら、学生諸君は「定期試験にとおるため」、「卒業して国家試験に合格するため」と答えるでしょう。それは間違いではありません。それでも、「患者さんに幸せになってもらいたいから」、「患者さんの人生や思いにこたえたいから」と語ってくれる学生諸君もいます。本学の学生諸君全員がこのような思いや夢をもって、サイエンティストとしての薬剤師や研究者を目指し自ら調べ学んでくれることが、私の望みです。

幸いなことに、本学には他の薬科系大学から一目を置かれる建学からの歴史、多くの卒業生、そして研究実績があります。私は、この大変恵まれた環境を活かしながら、今日に至るまで私自身を育てていただいた京都薬科大学の学生諸君、教職員の皆様と、これからも一緒に成長（共育）していきたいと思います。皆様には、今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ではございますが、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げ、本年が素晴らしい一年となりますことを念願しております。

創薬科学系
薬品化学分野
准教授　木村 徹

平成19年7月1日付けで薬品化学分野の准教授に昇進いたしました。

私は、昭和61年に本学・製薬化学科を卒業し、昭和63年に本学大学院を修了すると同時に薬品化学教室の助手として、有機合成化学系の実習およびペプチドの化学合成を基盤とした医薬品化学研究を行ってきました。

近年、健康補助食品や特定保健用食品として“ペプチド”を謳ったものが注目されています。健康ブームのおかげで、ビタミン・ミネラルから始まって脂質形のDHAやEPA、ポリフェノール、糖質系のオリゴ糖や糖アルコール、そしてタンパク質アミノ酸系のペプチドといろいろな健康に良いとされる成分が注目されてきました。“トクホ”としてのペプチド性食品には「血圧が高めの方に適する食品」「コレステロールが高めの方に適する食品」等々の厚生労働省のお墨付きがある様で、サプリメントとしてはアミノ酸源としてタンパク質より吸収が優れてい

ることが利点とされています。私どもの研究室では口から食べるペプチドではなく、DNAの情報を基に合成された生体を制御する物質としてのペプチドや、生体で合成された前駆体タンパクがプロテアーゼによって切断され成熟化・機能性タンパクに変化するステップに着目して研究を行っています。またこれらペプチドを効率的に化学合成するための手法についてもいろいろな方法を開発してきました。もともとペプチドは活性は優れているものの、生体内半減期が短いため薬としては適当でないとされてきましたが、近年の投与方法等の進歩によって医薬品として重要な地位を得ています。難治性疾患の治療に少しでも寄与できることを目標に今後も研究を続けていきたいと思います。

本学の発展に少しでも役立つことができるように頑張りたいと思います。

定年退職のご挨拶

医療薬科学系
病院薬学分野
教授　横山 照由

私は、1987年4月に京都薬科大学に新設されました病院薬学教室に教授として赴任し、2007年11月1日に定年を迎えるまで、丁度20年と7ヶ月本学にお世話になりました。この病院薬学教室は、20年前、当時の学長、故藤村一先生が、今後、病院・薬局の実習が必修となり、医療現場の教育が必要となるので、その分野の充実を目的に、全国の薬科大学に先駆けて設置された教室です。その後、多くの薬科大学で同じような教室が設置されるようになりました。そして藤村先生のお考え通り、病院・薬局実習は必修となり、さらに薬学教育6年制への移行となり、先生の「先見の明」の確かさに感心しています。

京都薬大に赴任し、旧3号館（現在の総合薬学センター）の2階に研究室を頂きましたが、机と椅子以外何もない状態でスタートしました。その後、徐々に実験機器も増え研究体制も整いましたが、初期の配属学生諸君には大変不自由をかけたのではないかと思います。20年の間に、学部生324名、修士72名、博士1名の卒業生を送り出す事ができましたのは、歴代教員の皆様のお陰で、感謝しています。

薬学教育6年制も順調にスタートしましたが、2010年からは病院・薬局の長期実務実習が実施となり、今以上に大変な時期となります。この時期に定年退職は、敵前逃亡であるとある先生に言われましたが、後は若い先生方に期待しています。

20年間、京都薬科大学で良き教職員の皆様とお会い出来、また、すばらしい学生諸君と過ごせたことを、大変有り難く感謝しています。

京都薬科大学が永遠に不滅である事を願っています。有り難うございました。

生命薬科学系
遺伝子工学分野
教授　加納 康正

去る10月20日に定年退職いたしました。昭和64年1月1日に京都薬科大学生命薬学研究所助教授に着任しまして、その数日後、昭和が平成へと移りましたので、平成元年は私の京都薬科大学元年でもあります。平成7年4月からは遺伝子工学研究室主任を任かされることになりました。私はそれまで学生に無縁な研究所ばかりを歩んできましたので、特別実習で20人もの学生を同時に研究指導することにはびっくりしました。しかし毎日が新鮮で楽しい発見の連続でした。あれからもう18年10ヶ月になります。学生諸君には教えられることばかりで実に有意義な日々を送らせていただきました。

私が研究を始めました頃は、まだ遺伝子を切ったりつないだりする技術はありませんでした。その頃の私は微生物の自然の性質をフルに利用して、ウイルス遺伝子やサルモネラ菌の遺伝子を大腸菌の遺伝子と接続して、遺伝子発現のメカニズムを調べていました。今では笑い話のような方法ですが、このときに得た知識や技術、考え方などが私の今日の研究の大きな支えと推進力になりました。学部生の「分子遺伝学」講義では分子遺伝学を歴史に沿って解説しましたが、そのほとんどは私が自分の研究歴を振り返るそのもののお話でもありました。「分子遺伝学特論」は沢山の研究者が純粋な知的好奇心で解き明かしてきた分子遺伝学が、今どのように花開こうとしているのか、これでよかったのか、など振り返ってみたい気持ちでビデオやスライドを使って学生と一緒に考えました。両講義とも、たくさんの学生に受講していただき、やりがいのある講義でした。同時に、学生諸君が分子遺伝学に強い関心を持たれていることを知る機会でもありました。薬学には今後益々遺伝子の理解が重要になってきます。理解できていることが常識であるという時代がすぐ先にあります。そのような意味で、生命薬学研究所がなくなり、今また遺伝子工学分野も消えようとしていますのは、京都薬科大学が薬学6年制を全うするために必要不可欠なことではありますが、惜しまれることです。学生諸君には、これまでと同じように、これからもずっと分子遺伝学に興味を持ち続けていただきたいと願います。

最後になりましたが、長い間本当にお世話になりました。皆々様のご多幸をお祈りいたします。

特集　臨床薬学教育研究センター

臨床薬学教育研究センターが新築されました。本センターは「病院・薬局へ行く前に」学内の1ヶ月実習を行う施設です。大学の実習でも白衣は着用しますが、医療現場で白衣を着用する意味は、患者さんに清潔感と安心感を持っていただくためです。本センターは医療現場への第一歩となる施設ですので、研究室等で時々見かけるヨレヨレの白衣や、汚れた白衣での入室はご法度となります。

将来、病院・薬局の薬剤師を目指す人はもとより、企業や研究に携わりたいと考えている人にとっても、医療現場を体験することは大切なことです。薬学を専攻した時の初心にもどり、身も心も清め、新しいセンターでの実習を有意義なものにしていきましょう。

臨床薬学教育研究センター　外観

2006年薬学教育6年制が導入され、学外での長期実務実習は病院・薬局で各々2.5ヶ月となり、従来の見学型から参加型への実習を行うことが決定されました。一方、大学においては薬剤師免許を持たない学生に参加型への実習を実施する前に、共用試験（ＣＢＴ（知識）、ＯＳＣＥ（技能・態度））と学内での１ヶ月の事前実習が義務化されました。京都薬科大学では社会的ニーズである質の高い薬剤師、すなわち問題発見解決型の実践的薬剤師を養成するため、2007年12月に新しい臨床薬学教育研究センターを竣工しました。本センターは地上３階、建築面積848㎡、延べ面積2317㎡で本校地の北部に位置しています。この施設には調剤室を始め、模擬病棟や保険薬局のカウンターを模した実習室、抗悪性腫瘍剤や高カロリー輸液を調製する無菌室(1)、(2)、製剤室、医薬品情報管理室、薬歴管理室、コミュニケーション教育を行う演習室、薬物血中濃度を測定し医師への処方設計を支援するＴＤＭ室（薬物治療管理室）等が配置され、臨床現場に対応した臨場感あふれる実習を行う予定です。また本センターは卒業生等を対象とした卒後実務研修への利用も考慮していきたいと思っております。

臨床薬学研修センター　施設紹介

1. 入り口

左側には情報処理センター、右側に臨床薬学教育研究センターが配置されています。調剤室は散剤、錠・カプセル剤、液剤、外用剤（軟膏剤、坐剤等）、注射剤の各エリアからなり、病院での汎用医薬品を用いて実習を行います。

医薬品へのコンタミネーションや細菌汚染を防止するため、入室時の手洗いは特に重要です。

2. 調剤室（散剤）

秤量→混和→分割→包装の一連の作業を通して散剤を調剤する。

ここには最新の散剤鑑査システムを導入した調剤台が設置されている。

3. 調剤室（錠・カプセル剤）

模擬処方せんを基に①処方鑑査、②疑義照会、③薬袋作成、④計数調剤、⑤薬剤鑑査等、処方せんの流れを理解し、錠・カプセル、外用剤の調剤を行う。また計数調剤の過誤例からその防止策を検討する。

4. 調剤室（液剤）

メートグラスを用いて液剤を調剤する。液剤の配合変化（配合不可、配合不適、配合注意）や小児薬用量、高齢者薬用量等についても考察する。

5. 調剤室（軟膏剤、坐剤）

軟膏板を用いて軟膏剤を混合する。溶融法を用いて坐剤を調製する。さらに軟膏剤や坐剤の特徴と基剤について考察する。

6. 無菌室前室

注射薬を製造する前に衛生的手洗いと無塵衣に着替る。また無菌操作法の習得と滅菌の概念を学習する。無菌室は左右に2部屋あり、おのおのエアーシャワーを浴びて無菌室に入室する。

7. 無菌室1

抗悪性腫瘍剤の調製を行う。無菌室1にはクリーン度の保障と調製者の安全を確保するため、クラスIIB対応の安全キャビネット（6台）が設置されている。但し実習では模擬薬を使用するので暴露の心配はない。

8. 無菌室2

点眼剤の調製や輸液の調製ならびに高カロリー輸液等の調製を行う。細菌や異物の侵入を防止するためクリーンベンチが6台設置されている。

9. 製剤室

抗悪性腫瘍剤調製時に使用するアンプル、バイアルを作成する。出来上がった製品の封入試験や異物試験を行う。

10. 病棟・保険薬局実習室1

病院のナースステーションと病室があり、ベッドサイドで模擬患者さんの服薬指導を実践する。写真右奥にはナースステーションが配置されている。

11. 病棟・保険薬局実習室2

保険薬局でのカウンター業務を実践する。来局患者さんへの服薬指導を含めたコミュニケーション法の習得を行う。

12. 医薬品情報管理室（ＤＩ）

医薬品の適正使用を推進するためには、医薬品の最新の情報を把握する必要がある。このＤＩ室には多くの資料、専門書等やインターネット接続のパソコンが完備されている。その中で医薬品情報の収集、整理、評価、加工、保管の一連の業務を行い、医療従事者からの質疑（課題）に対する情報提供を行う。

13. 薬歴管理室

模擬患者の病歴、薬歴、検査値等のデータから医師の処方意図を理解するとともに、疾患、薬物、検査値との関係について把握し、問題点を発見する。

14. ＴＤＭ室（薬物治療管理室）

薬物の血中濃度を測定し、母集団平均パラメータを用いて薬物動態を推定し、医師への処方設計を支援する。

ド　イ　ツ　滞　在　記

異文化体験
－ フライブルク大学主催ドイツ語夏期講座を体験して －

2007年に創立550周年を迎えたフライブルク大学はドイツ最古の大学の一つだ。その国際局が主催する「日本人のためのサマープログラムードイツ語とドイツ文化」に本学からも過去最高の29名そして国際コースに3名の計32名が参加した。今回で12回目を迎えた同講座はドイツ語初心者には最適の、大変充実した内容を誇る短期留学制度である。日本全国の大学に向けて120名の参加者募集が行われており、本学からの参加者も年々うなぎのぼりである。このような日本人学習者だけを対象としたドイツ語講座を開講しているのは数多い総合大学の中でもフライブルク大学だけである。今回から特に京都薬科大学の参加者のためにフライブルク市内の薬局を見学するプログラムが企画された。また昨年に引き続きフライブルク大学薬学部のユング教授のご好意により、薬学部の施設見学も行われ参加者たちはドイツの薬学教育、薬局現場を肌で体験する機会を得た。この夏期講座に参加した2年次生の代表者に「異文化体験」というタイトルでドイツでの体験や思い出を綴ってもらった。参加費（授業料＋寮費で約13万円）も格安、フランス・スイスへの日帰りバス旅行(料金は参加費に込み)もある。それに来年度からは大変人気の高いミュンヘン市内とディズニーランドのお城の原形といわれるノイシュヴァンシュタイン城へのバス旅行（有料）が追加される。授業は原則午前中で終わり、その後午後には毎日楽しい催し物も多数用意されている。関心のある方は6号館桑形研究室までお気軽に問い合わせください。

第二の故郷フライブルク

2年次生　岡本 一洸

今年の夏体験したドイツでの一ヶ月間の生活は、時間にすると短かったかもしれないけれど、すごく心に残る貴重なものだったと思います。ルフトハンザに乗って十数時間。たどり着いたドイツの地で始まった生活は、学生寮でルームメイトと共同で暮らすというものでした。寮同士が、結構、距離的に離れていたことや、自分自身が英語やドイツ語が苦手なこともあってか、暮らし始めた頃は、多少不安を感じていましたが、日数が経つにつれ、その不安が消し飛んでしまう程、毎日が楽しいものになりました。ドイツ人のルームメイト達とも親しくなり、料理を作って一緒に食べよう、ゴルフをしよう、映画を見ようなどと、事あるごとに、仲間に入れてもらったりもしていました。言葉があまり通じていなくても気持ちが通じていれば、こんなに仲良くなれるのだなと実感しました。留学という事で、勉強面も気になるかもしれませんが、プログラムでのドイツ語の授業は、フライブルクで暮らしていく日常の中で必要な内容が多く、使える状況に直面すると、少しでも授業で習ったことを活用して会話したいと思えるようなそんな楽しいものでした。時には、授業中に、アイスクリーム屋さん、スーパー、聖堂前で開かれる朝市にクラス皆で出かけ、会話の練習をしたこともありました。また、授業だけでなく、レクリエーション、日帰り旅行といったイベントも多々用意されていて、自分自身は、普段あまりする機会のない料理作りをするレクリエーションに主に

先生と記念に一枚!!

アルバン薬局見学

参加していました。どのレクリエーションに参加してもプログラムのチューターの人が一緒に行動し、楽しめるように色々サポートしてくれていました。今年は、ドイツの薬学部、薬局見学にも、京薬生は参加させてもらえたので、医薬分業において進んだ国であるドイツの薬局事情、仕組みなどについて、直接質問をぶつけたり、薬局の調剤室を見学させてもらったりと興味深い経験をさせてもらうこともできました。帰る二日前には、バーベキューパーティや、花火大会も企画してドイツ人のルームメイトを含め、友達と、ドイツでの最後の思い出作りもしま

した。あげていくときりがないくらい毎日、毎日がイベント盛りだくさんで、日本にいては、なかなか味わえないような体験がたくさんこのプログラムでできました。是非またフライブルクに行き、ルームメイト達や、仲良くなったチューターの人達に再会したいです。このように、サマープログラムとは本当に楽しい貴重な体験を提供してくれます。このチャンスを活かして、参加し、充実した有意義な大学二年次生の夏休みを過ごしてみてはどうでしょうか。

ドイツで過ごした夏休み

2年次生　久保 美和

大学生になって二回目の夏休み。1年次生の頃から桑形先生のクラスでドイツ語を学んでいた私は、ドイツへの短期留学の話に興味は持っていたのですが、英語圏の国ならまだしもこれまで全く関わりの無かった国へ、習い始めて間もない言語を使って行くことへの不安はありました。しかし、いざ日本から一歩踏み出してみると新しい世界への希望で心がいっぱいになり、行く先々で見るものすべてに感動していました。

私は国際コースで申し込んだため、あらゆるサービスが世界の国々よりも充実している日本からきた日本人のみ対象の日本人コースとは異なり、すべて自分でしなければなりませんでした。おかげで、いろいろと成長できた気がします。例えば英語。語彙力のなさすぎる私のドイツ語では挨拶程度しか話せないため、自分が1ヶ月間住む寮での日常生活のことや、交通手段の詳細、授業の単位のシステム、プログラムの中のあらゆる日程の申し込みなど重要なことも何もかも、とにかくすべてが英語だったため、一ヶ月毎日習ったドイツ語ほど急激な進歩はないかもしれませんが、英語力は上がったように思います。他にも、これまで日本にいる間なら家族をはじめ頼れる人がすぐそばにいたのに対し、ドイツではそんな風に困ったときに母国語で頼れる人は近くには同年代の友達だけで、しかも日本にいるように簡単には連絡も取れないため、問題が起きても自分ひとりで何とかしなければいけないときもありました。そのため、判断力や責任感、行動力など少しでも一人前と呼んでもらえるような人に近付けたのではないかと思います。きっといつも当たり前のように周りの大人に守られて生きている中ではなかなか経験できないことではないかと私は思います。

またドイツでたくさんの友達ができました。世界中の多くの人たちがこのプログラムに参加していたのです。日本人、ドイツ人を含め、少なくとも15カ国からきた人と友達になれました。偶然電車で相席になった人も、私たちが外国人だからというのもあるのでしょうが、ドイツの人はみんな初対面でも親しく話しかけてくれました。そんな人の温かさも改めて実感できました。

その上今年は桑形先生のおかげで、私たち京都薬科大学の学生はFreiburg大学の薬学部と町の薬局の見学をさせてもらえました。日本と同じこと、違うこと。きっと日本にいても調べられることもあるのでしょうが、実際に現地で直に話を聞ける、ものを見せてもらえることでしか感じられないことがあったように思います。

二十歳になった今、このような様々な経験をできたことは、これからの自分という人間の成長に大きな影響を与えたと思います。本当にこれまでで一番といえるくらい充実した一日一日を送れた夏休みでした。

フライブルクの街角で

おとぎの国のお城の湖で

彼らと過ごした1ヶ月

2年次生　大野 さゆみ

フライブルクで過ごしたのはほんの1ヶ月間でしたが、恵まれた環境や数々の貴重な体験のおかげで、私がフライブルクの虜になるには十分な時間でした。

向こうでは午前に行われるドイツ語の授業に加え、午後からはドイツ料理を教わったり、劇やコンサートを鑑賞したり、遠足をしたりといった様々なレクリエーションで、毎日を何かに没頭させてくれました。

また、個人的に友人と計画を立て旅行に行くこともありましたし、現地の薬局を見学させていただける機会もあり、そんな毎日の中で多くを学び、得ることができたと思います。

一方で私が最も刺激を受けたのは、毎日を過ごした“Vauban寮”において、でした。

キッチン、シャワー等の共同スペースを共有するフロアメイトと呼ばれる存在が私には6人いまし

た。5人のドイツ人と、1人のカナダ人です。彼らはつたないドイツ語しか使えず、身の振り方も分からない私にとても愛想良く応じました。毎朝「おはよう」と交わし、出掛ける時には行き先を告げ、帰ると夕食を共にし、その日の出来事を話しました。まるで家族のようなその安堵が、この1ヶ月間をより充実させたと思います。

さらに彼らは遊び方が上手で、毎晩のようにビールを片手に声を上げて騒ぎ、はしゃいだことをしながらも同時に、その場にいる全員で楽しむということを忘れませんでした。それは喧騒の中に1人の日本人で年少である私が取り残されないように常に計らってくれることからも分かりました。それがドイツ人の性分であると後で知りましたが、私のたどたどしい話でもじっと目を逸らさず驚くほど熱心に聞いてくれましたし、互いの言わんとするところが伝わるまで手を変え品を変え対話し、思いを通じさせることに喜びを感じ合いました。

1ヶ月が終わる日に部屋の掃除をしていると、フロアメイトの1人に“日本に帰りたい？それともこの部屋に残りたい？――私はもちろんここにいて欲しい”と言われ、彼らと過した日々が頭を巡り涙ぐんでしまいました。その際に手渡されたマグカップは一生の宝物です。

このプログラムは望めばあらゆる経験ができ、サポートも万全で何不自由なく存分に1ヶ月を送ることができます。フライブルクという土地も穏やか且つ便利で過ごしやすいですしね。この機会を利用して少し視野を広げに行ってみてはいかがでしょうか。

ドイツの街角で大道芸人と

Ｂクラスの授業風景

サマープログラムに参加して

2年次生　岡村 美希

ドイツ最高!!!

このプログラムに参加してから何度そう思ったことでしょうか。このプログラムに参加してから今まであまりなじみのなかった「ドイツ」が私の中で一番大好きな国になりました。書きたいことがたくさんありすぎるのですが、その一部を紹介させていただきます。

まず、私たちが通ったフライブルク大学は大学を中心として発達した小さな学生街の中にあります。日本と違い、塀で大学を囲うことがなく校舎が普通に街中に溶け込んでいます。私たちは初日にクラス分けをし、それからはクラスごとに授業を行いました。私のクラスはレストランでの注文方法などを中心に習いました。授業時間以外にもドイツ料理を食べに行ったり、学生バーでサッカー観戦をしたりと和気あいあいのクラスでとても楽しかったです。

また京薬生対象に薬局見学と薬学部見学というイベントが用意されていました。薬学部見学では学部の先生が案内してくださり、日本との大学制度の違いやドイツにおける薬学の位置づけなどの話を聞きました。

世界一のソーセージ

気さくなドイツ人紳士と一緒に

さて、授業は9時から12時半までだったため、午後からはいろいろなことが出来ました。午後からのすごし方ですが、大学側がいろいろなイベントを用意してくれたため、毎日何かしらすることがありました。私はケーキ作り、喜劇鑑賞、週末旅行に参加しました。特に週末旅行はバスで目的地まで連れて行ってくれる上、素敵なところばかり行くのでイチオシです。参加費無料も魅力のひとつですしね。ま

た私はもらった定期券で色々と旅を楽しんでいました。電車もいいのですがバスは絶対に日本では味わえない風景と出会え、ドイツに来たなぁと実感する瞬間でした。もちろん、フライブルクの町を歩くだけでも十分実感できますけどね！

私はドイツ語が苦手で、生活できるのかしら!?と行く前は心配だったのですが、実際行ってみると優しいドイツ人とおいしい食事のため最後には日本に帰りたくない!と思ってしまうほどでした。次またヨーロッパに行くときは、またフライブルクに帰りたいと思っています。

最後にこのプログラムを支えてくださったすべての人に感謝して、私の体験報告を終わらせていただきます。Danke schön！

薬局見学会：日本人女子薬大生10名が ヘルダンのウルバン薬局を訪問。

バーディッシェ・ツァイトゥング(バーデン新聞)　2007年8月21日（火曜日）

18 BADISCHE ZEITUNG　MENSCHEN & MEINUNGEN　DIENSTAG, 21. AUGUST 2007

Apothekenumschau

Einblicke: Zwölf japanische Pharmazie-Studentinnen besuchten die Urban-Apotheke in Herdern

VON UNSERER MITARBEITERIN ANNINA LOETS

Wer schon einmal im Ausland ein Medikament brauchte, weiß: Apotheke ist nicht gleich Apotheke. Dass es japanische Pharmazie-Studentinnen interessiert, wie eine deutsche Apotheke aussieht, ist also verständlich. Gestern bot das Sommerprogramm der Uni zehn Japanerinnen Einblicke in die Organisation einer deutschen Apotheke.

Es ist ein Bild, wie man es in Herdern nicht alle Tage sieht: An der Hauptstraße stehen zehn Japanerinnen. Trendsicher wie Kate Moss kichern sie unter stilechten Ponyfransen hervor, tuscheln sich zu. Als sie losgehen, zücken sie nicht etwa die Kamera und fotografieren die Kirche – sie gehen in die Urban-Apotheke. Die Mädchen sind nämlich keine Touristinnen. Sie sind Pharmazie-Studentinnen aus Kyoto und nehmen an dem „Sommerprogramm für japanische Studierende" der Uni Freiburg teil. In der Apotheke von Meinrad Kempf haben sie die Möglichkeit, die Unterschiede zwischen deutschen und japanischen Apotheken auszuloten: Wie das Computersystem funktioniert, wo die Medikamente herkommen, ob die Apotheker auch selber Präparate zusammenrühren – die Mädchen stellen ihre Fragen und kritzeln die Antworten in winzigen Schriftzeichen auf ihre Blöcke. „Ich möchte einmal die Apotheke meines Vaters übernehmen", erzählt Kayuko Muraki. Apotheken in Japan seien allerdings anders. Da würden noch richtig Medikamente angerührt.

Am Sommerprogramm der Uni nehmen insgesamt 119 Jugendliche aus ganz Japan teil. Morgens lernen sie vier Stunden lang Deutsch. Danach stehen Vorlesungen in Geschichte und Landeskunde auf dem Programm. Interessant seien aber vor allem die kulturelle Unterschiede, so Chantal Weber, Asien-Beauftragte der Uni. Die meisten seien das erste Mal im Ausland. „Viele sind an umfangreichen Service gewöhnt. Wenn mal ein Wasserhahn in der Stusie tropft, rufen sie gleich an und erwarten, dass das sofort repariert wird."

Das Besondere am Sommerprogramm liege deshalb auch in kleinen Situationen, etwa, wenn jemand selbstständig im Reisebüro einen Flug bucht. In Freiburg sind die japanischen Studentinnen noch bis 30. August.

Die japanischen Gäste bei Apotheker Meinrad Kempf　FOTO: INGO SCHNEIDER

写真：薬剤師マインラート・ケンプを訪ねた日本人訪問者

薬局といっても一様ではないことは、かつて外国で薬を必要とした者であれば誰でも知っていることだ。ドイツの薬局がどんな顔をしているのか、日本人学生の関心を引いたことは大いに理解できることだ。昨日、フライブルク大学の夏期講座事務局が日本人女子学生10名にドイツの薬局を実体験する機会を提供した。

ハウプト通りに10名もの日本人女性が立っているなどヘルダンでは非日常的な光景だ。ケイト・モスの如く流行に敏感で、ポニーのような綺麗なほつれ髪をした彼女たちはくすくすと笑ったり、お互いにひそひそ話しをしている。外出時、彼女たちはカメラを取り出だして教会の写真を撮ることもない。その彼女たちがウルバン薬局に行くのだ。これらの女性たちは旅行者ではない。彼女たちは京都からやって来た薬大生で、大学が主催する「日本人学生のためのドイツ語夏期講座」に参加しているのだ。マインラート・ケンプが経営する薬局で彼女たちは日独の薬局の違いを明らかにする機会を得た。例えば、コンピューターシステムはどのように機能しているのか、薬剤はどこでもらえるのか、薬剤師も自ら薬剤を混ぜ合わせるのかといったことを質問をすると、彼女たちはすぐにペーパーブロックに小さな文字で走り書きをしている。「将来、私は父親が経営する薬局を受け継ぎたい。日本の薬局はもちろんのことながら別物です。日本の薬局ではまだ間違いなく薬はかき混ぜられています」と語るのは参加者の一人村木加愉子だ。

大学主催の夏期講座には日本全国から119名の若者が参加しており、彼らは午前中4時間にわたりドイツ語を学ぶ。その後には歴史やドイツ事情の講義がプログラムに盛り込まれている。とりわけ関心を呼ぶのは文化の違いだと言うのは大学のアジア部門責任者のシャンタル・ヴェーバーだ。「彼らの大半は今回が始めての外国で、多く参加者はありとあらゆるサービスに慣れきっており、例えば学生寮の水道の蛇口がポタポタ滴り落ちると、彼らはすぐに電話をすれば、直ちに修繕がなされるものと期待しているのです」。そんなことが普通になっている中で、夏期講座で特別なことというのは、ほんのささやかな事態、例えば誰かが旅行会社へ行って自分で飛行機の予約をするといった点にもあるというのだ。これらの日本人女子学生はこのあと8月30日まで滞在の予定だ。

秋のオープンキャンパス開催

入試課

11月3日（祝・土）に秋のオープンキャンパスを開催しました。

今回は、高校生および付添者等合わせて、昨年を93名上回る283名の参加者があり、無事、盛会裏に終えることができました。

半日のスケジュールで、愛学館のA21講義室での「学長挨拶」、「大学紹介」、「在学生の話」、「卒業生の話」の後、「研究室見学」、「相談会」を実施しました。

「在学生の話」では、3年次生の小中健さんに大学生活やクラブ、サークル活動等についてお話をしていただきました。参加者からは、「在学生の生の声が聞けてよかった」、「大学生活が楽しいということがわかった」などの感想がありました。「卒業生の話」では、京都第二赤十字病院に勤務されている玉井美希さんをお招きして、本学での思い出や現在の仕事に本学で学んだことがどのように活かされているか、本学の魅力、本学に在籍することのメリット、生涯の友人ができたこと、社会に出て感じる本学のすばらしさなどをわかりやすくお話いただきました。参加者からは、「京都薬科大学での学生生活の数々の思い出や就職先での仕事内容の説明がとても詳しくてわかりやすかった」、「京都薬科大学の魅力、メリットの説明が非常に興味深く、参考になった」などの感想が多く寄せられ、たいへん好評でした。

「研究室見学」は、愛学館と8号館の研究室で行われ、約160名の方にご参加いただきました。参加者からは、「初めて見るものばかりで、とてもよかった」、「研究内容がわかってよかった」などの感想をいただきました。愛学館2階A24自習室での「相談会」は、72名の相談者がありました。相談内容は、入学試験や学費、カリキュラム、研究、就職先などで、高校生、付添者ともにとても熱心な姿が印象的でした。

今後ともオープンキャンパスをより一層充実していきたいと思いますので、皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

在学生の話

研究室見学

卒業生の話

相談会

受　賞

教育賞受賞のご挨拶

臨床薬学
教育研究センター
准教授　橋詰 勉

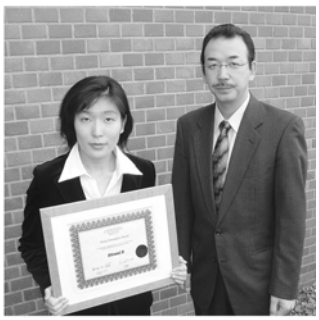
このたび、2006年度教育後援会教育賞を拝受いたしました。身に余る光栄と存じ、本学教育後援会関係者の皆様に厚くお礼申し上げるとともに、金澤教授をはじめ周囲で支えてくださった諸先生方に心より感謝の意を表します。

学内の多くの先生方と比し講義が上手いとも言えず、さらに日頃よりセンターの所属学生や1年次生への演習の進め方に四苦八苦し、いかに講義の効果をあげるかについて苦慮する毎日の中で、今回の受賞は大変励みとなりました。講義が終われば、褒めてもらうことはなくても、「ここが分からんかった」と言われることは多々。ということは、真剣に聞いてもらっていたのかと思えば、誤認のようです。私の服装を覚えているにも係らず、強調して話したつもりの内容でさえよく伝わらないことは日常茶飯事です。偉そうな顔に取り繕いながらも、どのようにすれば伝えるべき事を的確に伝えられるのか、何が足らないのか、に思いを巡らす毎日です。

こんな私にも数年前まではひとつだけ自慢（?）がありました。センターにおける私の重要な業務に学外の病院や保険薬局での実習の運営があり、その過程において、学生の方からの希望調査に始まり、実習施設の調整や、実習前の導入講義、終了後の報告書の受取など、すべての学生の方と面会する機会があります。卒業式を迎えるときには、半分以上の方のお名前は覚えておりました。しかし近頃では、役割分担が進んだせいか、私の記憶力の低下が原因か、その割合は低下する傾向にあります。教育の一歩目は、学生の方と向かい合うことだと豪語してきたものの、今では発言することを憚られる状況に陥りつつあります。このような状況下で、今回頂戴した教育賞は、私への警告でありかつ激励ではないかと痛感いたします。10月の教育後援会総会での受賞の際、会長である宮秋昭先生に温厚なご表情で表彰状を流れるように読んでいただきました。読み終えられたところで「よろしくお願いしますよ」と言われた眼光は鋭く感じられました。今回の受賞に際し、今までの自らの業務を振り返る良い機会と捉え、社会に役立つ多くの学生を輩出するべく、より一層の努力を積み重ねて行く所存です。今後とも引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

XVI International Symposium on Drugs Affecting Lipid Metabolism Young Investigator Award 受賞

病態生化学分野 飯居宏美さん(博士後期課程3年次)は、2007年10月4日～7日、ニューヨークで開催されたXVI International Symposium on Drugs Affecting Lipid Metabolismにおいて、Young Investigator Awardを受賞しました。受賞の対象となった研究題目は“Cytosolic Phospholipase $A_2\alpha$ Promotes Atherosclerotic Lesions in Mice”であり、高脂肪食に伴うメタボリックシンドロームの進展過程において、細胞質ホスホリパーゼ$A_2\alpha$というリン脂質加水分解酵素が、その病態を粥状動脈硬化症や脂肪肝へと進展させる因子として働いていることを解明し、この点が評価されました。



第51回 香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会 ベストプレゼンテーション賞 受賞

2007年11月10日～12日、長浜バイオ大学（滋賀県長浜市）で開催された標記の学会において、創薬科学系薬品製造学分野博士前期課程1年次の越智俊輔さんが行なった研究発表が「明快且つ内容が充実し、質疑応答が的確であり、高い評価が得られた」と認められ、ベストプレゼンテーション賞を受賞しました。（演題：「光学活性アミノエーテルを不斉反応剤とする三連続不斉炭素の構築」）

賞 状

ベストプレゼンテーション賞

京都薬科大 越智俊輔 殿

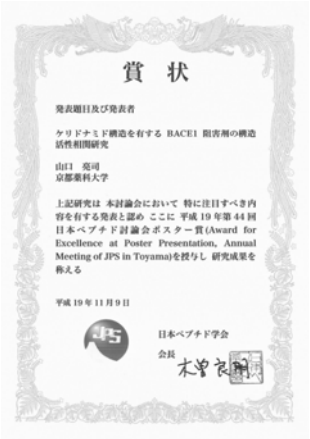
演題：光学活性アミノエーテルを不斉反応剤とする三連続不斉炭素の構築

あなたは、第51回香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会において、発表が明快且つ内容が充実し、質疑応答が的確であり、高い評価が得られました。よって、ここにその努力を称え、表彰致します。

平成19年11月11日
香料・テルペンおよび
精油化学に関する討論会
代表幹事 佐藤 菊正

第44回 日本ペプチド討論会
ポスター賞 受賞

2007年11月7日～9日、富山国際会議場にて開催された標記の学会において、創薬科学系薬品化学分野山口亮司さん(博士前期課程2年次)の行なったポスター発表が特に注目すべき内容を有すると認められ、演題「ケリドナミド構造を有するBACE1阻害剤の構造活性相関研究」がポスター賞を受賞しました。


賞 状

発表題目及び発表者

ケリドナミド構造を有する BACE1 阻害剤の構造活性相関研究

山口 亮司
京都薬科大学

上記研究は 本討論会において 特に注目すべき内容を有する発表と認め ここに 平成 19 年第 44 回日本ペプチド討論会ポスター賞(Award for Excellence at Poster Presentation, Annual Meeting of JPS in Toyama)を授与し 研究成果を称える

平成 19 年 11 月 9 日

日本ペプチド学会
会長

「卒業生からのメッセージ」
薬学生の皆さんに期待すること

近澤 真司

平成5年　生物薬学科卒業（応用薬理学教室）
平成7年　修士課程修了
（病院薬学教室　医療薬学コース）
所属：弘前大学医学部大学院医学研究科
内分泌代謝感染症内科学講座 博士課程1年
勤務先：北東北にある某病院　内科

皆さん、初めまして。

私は学部時代に応用薬理学教室（当時）、修士課程では病院薬学教室（うち1年は神戸大学医学部附属病院薬剤部にて研修）に在籍し、修了後は病院や調剤薬局に勤務していましたが、平成11年に弘前大学医学部に入学し、現在、内科医として勤務しています。

京薬生時代、私はまじめな学部生ではなく、薬理学の講義が開講されるまで授業もよくさぼりました。そのため、大学院生活は失敗の毎日で、実験してもデータは出ない、担当教官にはこっぴどく叱られるなど、大学院への進学を後悔する日々が続きました。それでも試行錯誤を繰り返し、徹夜で実験すると、不思議とデータも揃ってくるものです。こんな日々を過ごしながら、大学院の修了を迎えようとしていた時に、あの阪神淡路大震災に見舞われました。当時は本当に焦りましたが、なんとか修士論文は仕上がりました。また、震災の時は、神戸大学の薬剤部において手伝いもさせて戴き、災害時における薬剤師業務という貴重な体験もすることができました。

このように学生生活を振り返ってみると、楽しいことばかりでなく、正直な話、当時の生活は体力的にも経済的にも辛かったです。今思うと、若かったからこそできたのだと思います。では、現在の生活は辛くないのかと言えば、そんなことはありません。確かに、物質的な辛さこそありませんが、精神的な辛さがあります。誰もがそうですが、学生の時は、責任を課されることはありませんが、社会に出ると責任というものが課され、その責任を果たさなければいけません。例えば、仕事に対する責任、結婚すれば家族に対する責任などが知らないうちに求められます。私自身、仕事上の責任が大きくなればなる程、辛さが増すのを感じています。その一方で、責任の果たし方が上手くなると、仕事も楽しく、人間的にも成長できます。逆に、責任のない仕事は面白味がないです。なぜなら、責任を求められなければ、一生懸命になる必要がなく、満足感や達成感が得られないからです。そういう意味で、責任とはプラスとマイナスを同時に併せ持つ不可避なものではないでしょうか。

さて、皆さんには、将来社会人としての責任を果たしていけるだけの素地を学生時代に身につけて欲しいと思います。そのためには豊かな人間性の涵養が必要です。具体的には、クラブ活動への参加や研究室の仲間と友人同士の親交を深めて一生の友人を作ることに尽きます。薬学部の修業年限が6年になりましたが、教科書を読む時間が2年増えただけでなく、仲間と過ごせる時間も2年増えたと考えてください。社会に出ると、案外、教科書に載っていないことが役に立つものです。教科書だけでは医療現場はやっていけません。学生の皆さんが、ハートのある薬剤師になることを期待しています。

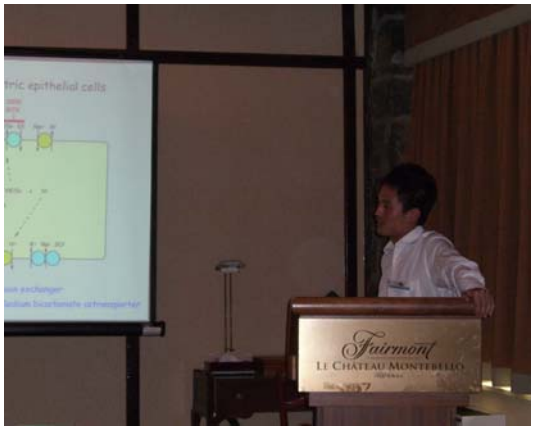
International Symposium in CANADAに参加して
～大自然の隠れ家で～

病態薬科学系 薬物治療学分野　林 周作

カナダのケベック州モンテベロで2007年10月2日から5日間にわたり行われたJapanese-American Association of Gastrointestinal and Ulcer-Acid Researchers (JAAGUAR) Young Investigators ForumとGastrointestinal Response to Injury (GIRI) CANADA 2007に参加するため、竹内教授、天ヶ瀬助教、粟飯原院生 (D3) と私 (D2) の4人はカナダの首都オタワへ向かいました。世界で2番目に大きい面積の国土をもつカナダは、公用語として英語とフランス語が用いられています。気候は若干肌寒さを感じましたが、想像していたよりも暖かく、過ごしやすそうでした。学会会場はオタワから約80マイルのところにあり、翌日シャトルバスの迎えまでの時間、オタワ市内を観光しました。真っ先に訪れたのは国会議事堂で、ここはオタワのシンボルとして観光の目玉となっているようです。議事堂の中心には時計塔がそびえ、その内部を頂上まで登ると、オタワ市内が一望でき、見応えのあるすばらしい眺めでした。他にもノートルダム聖堂などを見学し、オタワ市民の台所であるバイワード市場で昼食をとり、一通りオタワを満喫した後、いざ学会会場の街、モンテベロへと向かいました。

オタワ国会議事堂前にて
粟飯原院生、竹内教授、天ヶ瀬助教、筆者

モンテベロは首都圏の東端に位置する人口約1000人の小さな村でリゾート地として世界的に有名です。道中に見えた山の木々はかなり紅葉しており日本とはまた違った雄大な赤色の景色に心が和みました。学会会場のフェアモントホテルは世界最大級の規模を誇るログハウスで1981年にはG7サミットが開催された由緒あるホテルだそうです。到着後すぐに敷地内を散策すると、テニスコートは当たり前で、プールにスパ、ゴルフ場まで備えているホテルの敷地にはリスが至るところにおり、楽しい学会になることを予感させてくれました。その日の夜にはウェルカムパーティーが催され、学会の主催者であり竹内先生とも親交の深いUCLAのKaunitz教授とCincinatti Univ.のMontrose教授からの挨拶がありました。参加者は、色々と私にも話しかけて来てくれるのですが、何を言っているのかを聞き取るのに必死で、ろくな答え方しかできず、相手をがっかりさせてしまったのではないかと我ながら何度も情けない気持ちになりました。しかし、明日は自分がプレゼンテーションをする日なので落ち込んでばかりもいられないと気を取り直し、発表原稿のチェックを行い明日へと備えました。



発表中の筆者

発表当日は緊張のせいか予定よりもかなり早く目が覚めてしまい、朝食までの間ホテルの敷地内を散歩していると、すがすがしい朝の空気が気分を爽快にし、発表前のモヤモヤを取り払ってくれました。この日は天ヶ瀬助教、粟飯原さんと私の3人がJAAGUAR Forumで口頭発表しました。JAAGUARは日米の消化器分野に携わる研究者の会で、特に日本人若手研究者の英語によるプレゼンテーション力向上のための教育を目的としています。今回は、12分の発表、8分の質疑応答および10分のフィードバックと1人に30分もの時間が与えられました。これまでにも何度か英語でプレゼンテーションをする機会は頂いて、その経験が生かされて来ているのか焦ることなく落ち着いたペースで喋る事ができたように思います。質疑応答では片

言の英語で言いたい事を上手く伝えられないもどかしさはありましたが、それなりの形にはできたかなとホッとしました。それもつかの間、この会のメインでもある英語でわかりやすくプレゼンテーションするにはどうすればいいかについてKaunitz教授をはじめとした先生方にご指導して頂きました。スライドのレイアウトから研究内容まで幅広く厳しいご意見をたくさん頂戴し（少しぐらいはお褒めの言葉もあったと思います）、頭の中を整理するので精一杯でした。今回のように英語のプレゼンテーションについてネイティブの方からじっくりとトレーニングして頂く機会など日本に居てはそうそうないことで、今後の自分の研究生活に繋がる有意義で貴重な経験ができました。翌日からGIRIが行われ、竹内先生を始めとした招待演者による発表が3日間行われました。「骨髄由来の幹細胞が胃がん細胞の起源となる」というセンセーショナルな研究成果を発表したHoughton博士など論文で目にする消化器の分野をリードしている著明な研究者が次々とマイクの前に立たれ、テンポのよい魅力的な発表に興奮しっぱなしでした。発表後には圧倒される熱いディスカッションが繰り広げられ、瞬く間に時間は過ぎていきました。

Kaunitz教授（後列中央）と共にカヤックを漕いで

さらにこの学会が素晴らしいのは、参加者たちとの交流を深めるために昼食後レジャーの時間が設けられていることです。我々はKaunitz教授にカヤックに誘われ、湖へと出かけました。心地よい日差しの中、カヤックを漕ぎながら湖に浮かんでいると日頃の鬱憤から解放され、とても幸せな気持ちになりました。また、竹内先生とはパターゴルフに出かけ、先生はかつて東大ゴルフ部でならしたその腕を存分に発揮されており、日常とは違う一面を見ることができ良かったです。他には、かねてからの念願だったシューティングにも連れて行ってもらうなど盛り沢山で本当に楽しかったです。レジャーの後は早めの夕食を済ませ、なんとここから学会が再開され夜10時頃まで激しい討論が行われました。しかもその後はバーに飲みに行くらしく、このタフさが優れた研究を生み出すエネルギーなのかと感心させられました。

学会の締めに盛大なディナーが開かれ、フルコースの料理に舌鼓を打ち、参加者達との会話を楽しみながら時間は過ぎ、Kaunitz教授からの挨拶への拍手喝采のなか全てのプログラムは終了しました。しかし、余韻に浸る間もなく飛行機の都合でその日の深夜のうちに私達一行は、ホテルをあとにしました。今回の学会はこれまで参加したどの国際学会より考えさせられ、自分にとってたいへん恵まれた機会でした。学会に参加するにあたり米国消化器病学会からスカラーシップを頂いた事を含め、今回の経験を自信にし、切磋琢磨することで成長していきたい次第です。

最後になりましたが、今回学会発表の機会を与えて下さいました竹内教授、また学会の参加にご配慮頂いた理事長、学長をはじめ、大学関係者の方々に深く感謝いたします。

JAAGUARのマーク

2008年度一般公募制推薦入学試験結果

2008年度一般公募制推薦入学試験が2007年11月17日(土)に実施され、11月23日(金･祝)に合格発表が行なわれました。その結果は次のとおりです。

	募集人員	志願者数	合格者数
一般公募制推薦	83名	250名	102名

Library News

図 書 館

学生用図書（後期）の購入

2007年度の学生用図書後期分を次のとおりに購入いたしましたので、ご利用下さい。

書　　名	著 者 名 / 出 版 社
薬学入門 ： 薬剤師の新しい価値創造	大井一弥編集 / エルゼビア・ジャパン
病気を起こす遺伝子	フィリップ R.レイリー著、高野利也訳 / 東京化学同人
絶対わかる分析化学	斎藤勝裕，坂本英文著 / 講談社
生命科学のための機器分析実験ハンドブック	西村善文編集 / 羊土社
メディカルノート画像診断	小川敏英編集 / 西村書店
生物物理化学 1,2	E.A.ドーズ著 ,中馬一郎［ほか］訳 / 共立出版
創薬論	村川武雄著 / 京都大学学術出版会
恐怖の病原体図鑑 ： ウイルス・細菌・真菌完全ビジュアルガイド	トニー・ハート著 ,中込治訳 / 西村書店
細菌の栄養科学 ： 環境適応の戦略	石田昭夫［ほか］著 / 共立出版
最新創薬学2007(遺伝子医学MOOK ； 7)	杉山雄一編 / メディカルドゥ
Newパワーブック物理薬剤学・製剤学	金尾義治，北河修治編 / 廣川書店
カラーイラストで学ぶくすりの作用メカニズム	平野和行，廣田耕作著 / 医学書院
薬を育てる薬を学ぶ	沢田康文著 / 東京大学出版会
ファーマシューティカルケア・ファーストステップ	高久史麿[ほか]監修 / ライフメディコム
医薬品添加物事典	日本医薬品添加剤協会編集 / 薬事日報社
心臓リハビリテーション	濱本紘，野原隆司監修 / 最新医学社
遺伝子技術の進展と人間の未来	松田純著 / 知泉書館
生命の倫理 ： その規範を動かすもの	山崎喜代子編 / 九州大学出版会
知っていますか?医療と放射線	放射線医学総合研究所編 / 丸善
医用放射線計測学(診療画像検査法) 改訂	渡部洋一［ほか］著 / 医療科学社
面白いほどよくわかる毒と薬	毒と薬研究会著 ,山崎幹夫編 / 日本文芸社
化学の目でみる地球の環境 改訂版	北野康著 / 裳華房
パソコンで簡単!すぐできる生物統計	Roland Ennos著、打波守[ほか]訳 / 羊土社
文献管理PCソリューション	讃岐美智義著 / 秀潤社
超図解PowerPoint 2007総合編	エクスメディア著 / エクスメディア
形の科学百科事典	形の科学会編集 / 朝倉書店

他 全66冊

書名リストは、図書館ホームページ（http://libopac.kyoto-phu.ac.jp ）をご覧下さい。

図書館開館日程

1月

日	月	火	水	木	金	土
		1	**2**	**3**	**4**	**5**
6	7	8	9	10	11	12
13	**14**	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	**30**	**31**		

2月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	**11**	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	**29**	

3月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	**15**
16	17	18	19	**20**	21	22
23	24	25	**26**	**27**	**28**	**29**
30	**31**					

太字が休館日です。
臨時に休館する事がありますので、図書館掲示板で確認して下さい。

2007京薬祭を終えて･･･　　2007年度京薬祭実行委員長 3年次生　木村 嘉彦

実行委員長として迎える2007京薬祭。この日の成功のために去年から準備していたことを思えばなんて長い間このことを考えていたのだろうと思います。この一年間は何かにつけて色々なことを学園祭のことと結びつけこの日の成功のことだけを考えてきました。学園祭が近づくにつれ夜ごとに学園祭が失敗する夢ばかりみてうなされ、プレッシャーに押しつぶされそうな日々ばかりでしたけども、そうして迎えた京薬祭が無事に終わり成功した時は涙が出るくらいうれしく、満足感と充実感でいっぱいでした。京薬祭の成功に向けて初期の段階から一緒に学祭全体のことで悩んでくれた幹部、学園祭全体の土台を支える仕事をやってくれた三年次生、ステージ等の企画を担当し学園祭を盛り上げるのに働いてくれた二年次生、一年次生。このどれが抜けても学園祭が成功になることはなかったと思います。本当にお疲れさま、そしてありがとう。

僕が学園祭を終えて改めて思ったことがあります。それは『感謝』の気持ちです。僕自身しんどくなった時に三年次生に助けてもらったり、実行委員長になったときも先輩にアドバイスを頂いたり、学生課の方々には毎日といっていいぐらい話をしにいき一つ一つ許可をもらいにいったりと言い出したらきりがないくらい色々な人に助けてもらいました。人は一人では生きていけないと改めて思った三年間でした。それとは別に思うのは、実行委員に入らなければ知り合うことがなかった人間と知り合えて三年という時間をかけて『仲間』となれたことです。このことも実行委員をやっていなかったら思っていなかったことだと思います。今の後輩たちにもこの気持ちを味わって欲しいと思っています。思い起こせば僕の実行委員としての始まりは一年次生で剣道部に入った時に、部活の先輩に実行委員は楽しいし友達もたくさんできるよといわれ、ほぼ強制的に実行委員に入らせられたことから始まりました。こんな始まりでしたが、このことがなかったら今のこの充実感はなかったと思います。

『実行』を引退した今、苦しかったこともたくさんありましたが『実行』に入れてもらったことで得られたものがたくさんありました。『実行』で三年間お世話になった先輩方、こんな実行委員長についてきてくれた三年次生、後輩達には感謝してもしきれない気持ちです。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、2007年度京薬祭の開催にあたり、ご理解、ご協力を頂きました全ての関係者ならびに近隣住民の皆様に、深く感謝すると共に厚く御礼申し上げます。

2007年度後期試験日程

教務部　教務課

シラバスにも一部掲載しておりますが、2007年度後期の試験日程は下表のとおりです。

また、再試験受験手続について、例年手続きが遅れる学生が見受けられます。日程等（再試験手続の詳細は後日掲示で連絡します）よく確認しておいてください。

「再試験受験許可書・領収書」については、再試験を受験する際に必要です。手続後、再試験受験時まで紛失しないよう大切に保管してください。万が一紛失した場合は、教務課で再発行をしますので申し出てください。

≪後期試験等日程表≫

年次	試　　験	試験期間	合格発表	手続等
4	薬学特別演習 正規試験	1月 8日（火）～ 1月 9日（水）	1月23日(水)に掲示で発表 (予定)	
	薬学特別演習 再試験	2月 7日（木）～ 2月 8日（金）	卒業査定会まで発表しません	1月30日(水)・2月1日(金)
1～3	後期試験	1月 8日（火）～ 1月17日（木）	1月30日(水)に掲示で発表	
3	後期科目再試験	2月 5日（火）～ 2月 8日（金）	進級査定会まで発表しません	後期試験の合格発表期間を「再試験受験願」受付日とします ［1/30(水)･2/1(金)］
1～2		2月12日（火）～ 2月19日（火）		

教育後援会からのお知らせ

2007年度の教育後援会総会が10月5日(金)13時30分からA23講義室に於いて開催されました。

宮秋会長、滝野理事長の挨拶があり、西野学長からは「本学の現状について」の説明がありました。

その後議事に移り、2006年度の決算報告に続き、2007年度事業計画ならびに予算(2007年10月1日～2008年9月30日)が下記のとおり決定されました。

また、「KPUnews」の発送を年2回から、今後は年4回(発行の都度)父母宛に送付することとなりました。

議事後、2006年度教育賞（学生の教育に多大な貢献をし、その資質向上に功績のあった教員に贈られる）の表彰式が行われ、受賞者である橋詰准教授（臨床薬学教育研究センター）に、宮秋会長から表彰状ならびに副賞が贈られたのに続き、「学生の憩いの場所」整備事業としてベンチ、テーブルなどの寄付目録が、宮秋会長から滝野理事長に贈られました。

最後に、進路支援部長の後藤教授から「学生への進路支援について」の説明の後、学校側との活発な質疑応答があり、盛会裏に終了しました。

（単位：円）

項　　目		予 算 額	使　　途
学生生活支援事業		1,800,000	学生教育研究災害傷害保険料補助（例年新入生全員に付保）
		200,000	保険適用外初診料補助（上記保険適用外の初回治療費を補助）
		1,000,000	学生補助金（学生自治会の意見を聴取、要望に対して柔軟に補助）
		1,100,000	卒業記念品（教育後援会名で、卒業生個々に記念品を贈呈）
		600,000	卒業祝賀会協賛（卒業生ご父母にご参加頂くため、京薬会と協催）
		150,000	弔慰金（学生及びそのご父母に対して支給）
		1,500,000	学部生英語受講料補助（学部生を対象に、学内で開講する英語課外講座の受講料の一部を、1人当たり15千円を限度に補助）
		200,000	一般図書の寄贈（専門図書を除く）
		2,000,000	学生の「憩いの場所」整備事業 快適な学生生活を過ごしてもらうための環境整備
	小　計	8,550,000	
教育研究支援事業		3,280,000	国家試験対策支援　2008年の4年次生用　参考書代
		200,000	教育賞
	小　計	3,480,000	
合　計		12,030,000	

ク　ラ　ブ　だ　よ　り

管弦楽部

私たち管弦楽部は先月2日に第35回定期演奏会を終えました。たくさんの方にご来場いただき、たいへんうれしく思っております。本当にありがとうございました。

また、この演奏会をもって、今まで部をまとめてくださっていた3年次生の先輩方は、少し活動から離れられます。新たなメンバーで、昨年12月にクリスマス会を行い、部内の親睦を深めました。この3月には春合宿も計画しています。先輩方により培われてきた伝統を守りつつ、より良いクラブ活動ができるよう頑張っていきたいと思います。

その他管弦楽部についての詳細はこちらのホームページをご覧ください。

http://orchestra.musicinfo.co.jp/~kpuorche/

お　知　ら　せ

第93回薬剤師国家試験

第93回薬剤師国家試験は、次のとおり実施されます。

試験期日　2008(平成20)年3月8日（土）
　　3月9日（日）

試験地　北海道　宮城県　東京都　石川県
　　愛知県　大阪府　広島県　徳島県
　　福岡県

試験科目　(1) 基礎薬学　(2) 医療薬学
　　(3) 衛生薬学
　　(4) 薬事関係法規及び薬事関係制度

合格発表　2008(平成20)年4月3日(木)午後2時

第13回京都薬科大学一般公開講座

10月20日（土）愛学ホールにおいて第13回公開講座を開催いたしました。はじめに西野学長の挨拶があり、その後、本学の濱崎教授による「すこやかに明日を！～歩きましょう～」のテーマで、健康とはどんな状態をいうのか、健やかに生きるための秘訣について講演され、歩くことの重要性やウォーキングを効果的に実践するためのコツなどにも触れながら、これからの心と体の健康づくりを考える身近でわかりやすい話に、約120名の参加者は熱心に耳を傾けていました。

その後、場所を体育館に移し、健康科学分野と武田病院のスタッフによる「健康度チェック」やOBによる「くすりの相談」生薬学分野の「めずらしい生薬」、今年初めての取組みとして「健康相談」のコーナーが設けられ、臨床薬理学分野の中田教授が健康についての相談を受けられました。環境と健康コーナーでは公衆衛生学分野による「シックハウス症候群とその原因物質」、薬物動態学分野からは「薬の飲み方、使い方」、学長からも「日常生活で役立つ微生物の知識」について展示され、多くの方が熱心に見聞きされていました。

今年の参加者は特に年配の方が多く（50歳以上の方が100％を占めた）健康への関心の高さが伺えました。それぞれのコーナーでは順番待ちのところも出ていましたが、参加者は各コーナーを巡回しスタッフの熱心な説明に聞き入るなど大変好評でした。

本学での開催も10回目となり、「毎年秋には、薬大で公開講座があるので楽しみや！」という声も耳にし、アンケートの中には「来年も楽しみにしています」や「お礼の言葉」などが多く、開かれた大学として地域に定着してきたことが感じられました。

2007年度動物慰霊祭

10月25日（木）午後2時から動物慰霊祭を、学内の慰霊碑前において執り行いました。この慰霊祭は、日頃教育・研究に貢献をした多くの動物達に感謝と慰霊の念をこめ、毎年行っているものです。

当麻寺の増田住職の読経の中、滝野理事長、西野学長、田村常務理事、藤本動物研究センター長をはじめ教職員、また多くの学生が次々と焼香をし、動物の冥福を祈りました。

最後に増田住職が「世の中にはいろいろな格差がある。学歴の格差、社会的地位の格差等々。最近は心の中にまで格差がおよび、モラルの欠如や犯罪につながっている気がしてならない。ぜひ、心だけは格差のない教育をしてほしい」と話されました。

「心の格差のない教育」。胸に響く言葉でした。

人　　事

退職

2007.10.20付
　生命薬科学系 遺伝子工学分野　教 授　加納 康正

2007.11.1付
　医療薬科学系 病院薬学分野　　教 授　横山 照由

2007.12.16付　事務局長　菱木 正明

称号授与

2007.9.25付　名誉教授　太田 俊作
2007.11.2付　名誉教授　横山 照由

京薬会だより

＜学生支援策＞

京薬会では、今年度から学生への新たな支援策として次のような取り組みを行っています。

○過去1年、対外試合において優秀な成績を収めたクラブ、京薬大の評価（名声）を高める活動を行ったクラブへの表彰。

※今年度は、はじめての試みでもあり、自薦により応募してきた6クラブ（サッカー部、剣道部、管弦学部、女子硬式庭球部、女子バスケット部、空手道部）のうち、運動系の5クラブに対し、京薬祭（11月3日）のオープニングセレモニー時に副賞を添えて表彰し好評を博しました。

※文化系の管弦学部にあっては、2008年4月の代議員総会時において、部員とOBによる合同演奏会を披露して頂く予定。

＜卒後教育＞

今年も約500名の受講者に対しマルチメディア講義を行い、「肝疾患治療薬の変遷と抗肝炎ウイルス療法の急展開」、「泌尿器疾患の実際と薬物療法」、「処方解析と服薬指導」や「治験に関わる薬剤師として」等各講座共好評を博しました。受講者からは、「講座の回数の増」や「地方における開講」といった多くの要望が出されました。

＜公開講座＞

濱崎先生の「すこやかに明日を！～歩きましょう～」の講演には約120名の参加があり、「ウォーキングを効果的にする2カ条」や「健やかに生きる5カ条」といったテーマに熱心に聴講していました。

毎年行っている健康科学分野と武田病院グループによる「健康チェック、体力診断」は大変好評で順番待ちの列が出来ていました。